8) 東海区水研：蒼鷹丸調査資料，１９６７～１９６９，未発表．

9) 平野敏行・藤森完・上原進・杉浦健三・藤本実・小原久美子：漁業資源研究議報，5, 8－14（１９６６）．

10) 五十嵐正治・沢田易治：静岡水試研報，2, 1－18（１９６９）．

5．１都３県水試による協同調査の現状

花　戸　忠　夫（千葉県水産試験場）

関東近海に来遊するマサバについて、関係１都３県水試では従来より独自の立場で調査研究を進め、それぞれかなりの成果が得られて来ているが、近年にいたり北部海域での漁獲の増加、ソ連船の入漁等、この資源に対する関心が非常に高まつてきた。そこで１都３県水試では４４年漁期よりさらに研究の充実をはかり、業界に寄与する目的をもつて組織的な調査を行つてきている。

すなわち、各試験船による漁期前、漁期中一斉調査、環境、生物調査等をそれぞれ分担して行うこと、また陸上における生態調査でもさらに充実した研究を進めるとともに、研究業績についても総合的な討議を経て統一された報告を出すこととした。

これ等の結果、４４年漁期については４４年１１月統一報告書として業界に発表された。

さらに、４５年漁期についても１月７日より関東近海全域の漁期前調査を一斉に行い１月１３日勝浦市に参集して調査結果の検討、初漁期の予測が発表されている。

このように今後一層関係水試は協力体制を緊密にして成果の向上をはかり、業界に寄与したい。

6．関東近海に来遊するマサバの生態

鈴　木　弘　毅（神奈川県水産試験場）

関東近海に来遊するマサバについての生態は、東水研をはじめ１都３県水試、関係団体等により徐々に明らかになりつつあり、その成果は漁況速報、漁況予報に反映されている。

現在、直面している問題として、主に下記の３点があげられる。

(1) 性成熟進行の不規則。

(2) 南下主群と北上残留群との関係。

(3) 漁場間の魚群の関係。

この解明のためには、従来から行なわれている分布、成熟度の変化による方法のみでなく、多くの角度から究明する必要がある。

そこで、化学的手法（肝蔵粗脂肪量測定）を用い、現在調査中である。ただ今回報告する結果は、